二〇一四年九月一九日

夕映えて真珠びかりすうろこ雲　はく子
古民家の茶房の卓に虚栗　うつぎ
日に映えて艶増しにけり実むらさき　有香
大磐石がんじがらみに蔦もみぢ　菜々
曼珠沙華浄土となりし能勢路かな　よし子

二〇一四年九月一八日

すすきの穂こうべを立てて風いなす　ともえ
添へ棒をされて自然薯届きけり　うつぎ
幼の手ひらき団栗見せくれし　ぽんこ
石仏尾花の丈に埋もれけり　有香

二〇一四年九月一七日

魁の鴨羽繕ふ湖畔かな　よし女
秋気澄む巷にミサの鐘ひびく　かず
亀数多首出して池澄めりけり　なつき
豆腐屋のラッパに声や路地の秋　よう子
落ち栗を帽子に拾ふ山路かな　みちほ

二〇一四年九月一六日

水脈に水脈重ねて鴨の陣進む　よし女
城址の碑に凭れ見る村芝居　うつぎ
倒れゐる案山子に遊ぶ雀どち　よし子

二〇一四年九月一五日

白塀に友禅模様蔦もみじ　よし女

二〇一四年九月一四日

金の鈴はた銀の鈴虫すだく　三刀
丹田に力を入れて南瓜切る　満天
秋の日を呑み込む如くポスト立つ　つくし
子別れの木偶のしぐさに秋思憑く　よし子
秋霖に身体寄せあふ牧の馬　みちほ

二〇一四年九月一三日

道しるべ古りて読めざる萩隠れ　ぽんこ
一里塚ここにあるぞと残る虫　菜々

毎日句会みのる選・二〇一四年九月二一日